



山陽スピリット ニュース No.16

2019 (令和元) 年 9 月 27 日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

我が恩師 太田健一先生

山陽学園大学 非常勤講師

阿部 紀子

「まあ、お茶でも飲んでいきんさい」

本館7階のエレベーターを降りてから二つ目の部屋を訪れると、必ずと言って良いほど、その台詞を言われた。その台詞の主は、太田健一教授（後に名誉教授）である。私が知っている太田先生との思い出を述べてみたい。

私が、山陽学園大学第2期生として国際文化学部比較文化学科に入学したのは、1995年である。当時2期生は1期生と交流が希薄であり、相談をすることもできず、必修科目以外ほどの講義を履修すれば良いのか模索せざるを得なかった。しかも、選択科目は私の興味がある内容かどうかで決めるが、必修科目は否が応でも履修しなければならなかった。その必修科目の中に、太田先生の「日本史」があった。もともと日本史は得意な科目なのだが、唯一近現代史は苦手意識をもっていた。したがって当初は、近代史を専門とする太田先生の講義に関心がなかった。むしろ、「できれば避けて通りたい」と思ったほどである。しかし、その考えは、先生の講義を受けて、払拭された。

整えられた白髪に、イッセイ ミヤケの服をこよなく愛し、特にグレーのスタンドカラーの上下でビシッと決めておられることが多かった。時には、赤いセーターをインナーに着ていらっしゃる姿も印象として残っている。先生の第一印象は、優しいジェントルマンであり、講義内においても期待を裏切らず優しく分かりやすかった。また私の同期の中には、



複数人にわたる太田先生の親衛隊がいて、先生の部屋を訪れると常に賑やかだった。

3年生になると、ゼミを決めなければならず、先に述べたように日本史が得意

科目であったことから、即決で太田ゼミを選んだ。だが、先生を慕っている同期が沢山いる中、不真面目で先生と余り距離を縮めようとしなかった私は、ゼミ生の中でも異端児だったと思う。それでも、先生は私を見放す事なく、逆に気にかけてくださっていた。それを示すエピソードを取り上げてみたいと思う。3年生の夏、邑久にある国民宿舎にて太田ゼミの宿泊研修が行われた。夜に慰労会が開催されることとなっていたが、私は正直億劫な気持ちであったので部屋に籠ろうと決めていた。それを察した先生は、「阿部君、ワインは飲むか？」とお聞きになり、飲まない旨を伝えると「なら、ビールを買っておくから、慰労会には必ず顔を出すように」と言われ、私だけしか飲まなかったビールを本当に購入してくださっていたのには驚いた。このように学生一人一人に目を向け、意識して取り組まれる姿は、私が卒業してからも変わらなかった。また大学院進学の際に尽力して頂いたことを皮切りに、私の人生に大きく影響を与えてくださったと言える。

県外の大学院で過ごしていた私に、太田先生が「母校に帰ってこないか」と連絡をしてこられたのは博士課程2年の終わり頃であった。その頃、博士課程のゼミ担当であった教授が病で倒れ離職されてい

た。その教授は、私だけは同県人であったことから離職後も大変目をかけてくださっていた。太田先生とも顔見知りであったこともあり、教授に太田先生から連絡があったことを伝えると「せっかくの機会だから」と背中を押して頂いた。このような経緯から、博士課程3年の頃に山陽学園大学へ戻ることが決まったのであった。

2004年4月に、太田先生と共同で「人権教育」の講義担当をすることとなった。初めて教壇デビューを果たしたのだが、当初は「人権教育」を担当することは大変気が重かった。人生経験が未熟な私が、学生の心に響く講義展開が出来る自信が全くなかったからである。それに気付いた太田先生は、私に自信がつくようにアドバイス等をして常に奮起させてくださった。

また、「人権教育」以外では「古文書学概論」も共同で講義を行ったのだが、その頃にはこれまでの恩師と教え子という関係から次第に同志のような関係に変化していった。講義においては学生に対して厳しく臨む私と優しくて人格者である先生と、教育者としての考え方が正反対であった事から、ときに衝突をするようになっていった。

しかし、それが理由で軋轢が生じ、先生と私が関係を断ったということは全くない。時には恩師と教え子の頃のように戻り、時には同志のような間柄であった。

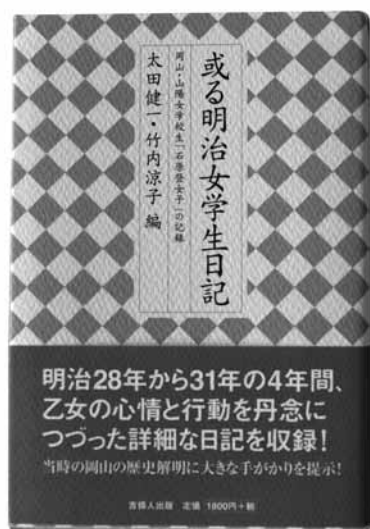
また、山陽学園短期大学の知名度があったとはいえ、設立当時の山陽学園大学は、県内外ともに認知度はまだまだ十分ではなかった。そのことを憂えた太田先生は、学園の発展のために奔走されていた。例えば、当時話題であった人気狂言師を講師として招致し、大学の知名度をあげようと図られた。他にも、一般公開講座の立

ち上げやその講座の出版等と、色々なことに取り組みされた。

上記のように、学園の発展のため大変尽力され、ご多忙な日々を送られていたのだが、執筆活動に対する情熱も本当に凄まじかったと言える。先生は、ワープロ等を一切使わず、全て手書きで取り組まれていた。特に、晩年に大病を患われていたにもかかわらず、何冊もの本の出版に向けて執筆に打ち込まれていた。私には生涯かけても先生を超えることは、とても無理だと痛感し、先生の偉大さに改めて感服する。

最後に、先生の訃報の連絡が入ってきたのは、私の末娘の1歳の誕生日であった。誕生日パーティーをしていた最中であったことから、訃報を受けた時の状況は、今でも鮮明に覚えている。「私の事を、絶対に忘れるなよ」という先生からのメッセージで、敢えてその日に旅立たれたかもしれないとさえ自分には思えたほどであった。

先生の長い教員生活の中では、私が入学してから先生が逝去されるまでのたかだか約20年の関係ではあったが、先生から「学生一人一人にきちんと目を向けること」といった教員としての心構えや「論文に対する情熱のもちかた」等と様々なご指導頂いたことを活かし、教え子として恥じぬよう、これからも前に進んでいきたいと思っている。



『或る明治女学生日記』(吉備人出版)

太田健一先生のご業績の一つで、明治期に山陽女学校を卒業した石原登女子(または登女)が、明治28年(1895)から31年(1898)に綴った「日記」の翻刻である。

この日記は、岡山教会や山陽女学校に関係する信徒や、その周辺にいる市民たちの動向を伝えており、山陽学園の歴史のみならず、岡山の歴史を解明する上でも、貴重な資料である。

※日記の原本は山陽学園大学・短期大学図書館が所蔵
広報・山陽スピリット推進室